
とある科学の雷光共鳴 《Lighting》

だいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の雷光共鳴《Lightning》

【Nコード】

N6674Y

【作者名】

だいふく

【あらすじ】

隣の部屋から騒音が聞こえてくる。

「うるせえな…」

鳴神響輝は呟くが、止みそうにない。

仕方無いので部屋を出るとそこには片脚を押さえて悶えている隣人、上条当麻と純白のシスターがいた。

これは上条当麻の物語を原作のストーリーに沿って描かれる別視点

からの物語。

第一話序章 《幻想殺しの少年の隣のお話》 (前書き)

新作完成だあああああ！

第一話序章 《幻想殺しの少年の隣のお話》

七月二十日

隣の部屋から声が聞こえてくる。

どうやら隣人、上条当麻が朝から誰かと話しているようだ。やたらとアクションを交えてだが。

「うるせえな」

部屋の窓際に置いてある黄色のソファアの上に寝転んでいる青年が呟く。

青年の着ている黒い地にナナメに白いラインが入ったパーカーとどこにでもあるようなジーパンからうかがえる体格は世間一般で言えば痩せている方だ。少しつり目気味の眼は鷹のように鋭く、世間的に見てもイケメンと呼ばれる人種だろう。髪形は右目が隠れるくらいに長い少し癖のある質のいい黒髪をボサボサにしている。

青年はソファアに寝転んだまま大きく背伸びをして眼を閉じた。

総人口二三〇万人。東京西部の大部分を占める巨大な都市。人口の

八割が学生というところから『学園都市』と呼ばれている

学園都市に住む生徒達には、超能力を発現させるための特殊な授業が組まれており、その能力は、定期的な身体検査システムスキャンによって「無能力（レベル0）」から「超能力（レベル5）」までの六段階で評価されている。

青年————なるかみ ひびき鳴神響輝は玄関の外から聞こえてくる男女の声で目を覚ました。

会話は聞き取れないが男の方は隣人の上条のものだろう。女の方は聞いたことがない。

その声を聞きながら鳴神は少しボーツとする。

「……………コンビニでも行くか…」

鳴神はズボンのポケットに財布と携帯があるか確認して部屋を出た。

部屋の外に出ると、片脚を押さえて悶え苦しむ上条と純白の修道服を着た外国人の少女がいた。

（外国人なんて珍しいな……。しかも白の修道服か……）

鳴神は外国人をあまり見たことが無い人だ。

ちなみに学園都市には大きな教会はない。しかもこの第七学区までシスターが出てくるなんて事はないので、こんなしょぼくれた男子寮に来ると思えない。

どちらにしろ鳴神と上条は隣人以上の関係ではないので厄介事には首を突っ込まないことにした。

そのまま二人の横を通り過ぎコンビニに向かう。

コンビニで昼に食べる鮭握り買い、家に帰る鳴神たが玄関のドアを開けた瞬間に眠気が襲ってきた為、先程まで寝ていたソファで寝てしまった。

今度は外から聞こえる爆音で目を覚ました。

部屋が異常に暑い——いや、正確にはこの学生寮全域の気温が何かの影響により異常な数値を出しているのだ。

「くそ……」

呟くと鳴神は一瞬にして部屋から消えた。

彼の能力は『ライトニング雷光共鳴』

大能力（レベル4）で電撃使い（エレクトロマスター）に近い能力であるが少々異質な能力だ。

通常時の最大出力は6億ボルトだが雨天時の最大出力は学園都市第三位の最大出力10億ボルトを軽く超えるため計測不能となる。

他人の体内の電気信号をある程度乱すことができ、対象者を酷い立ち眩みにすることが可能であり、ある程度までなら磁力操作もすることができ万能な能力だ。

能力名の由来は、身体を電気に変換できるところからきており、自身を電気に変換することで電流と変わらない速度で移動が可能。その時通った場所は感電する。

この電気変換能力を静電気が多い場所で使用すると身体に大きな負担がかかるため電撃使いに弱い。

彼はこの能力を使い寮の隣の建物の屋上に一時避難した。

「それにしても……何で俺の寮から煙があがってんだ？」

彼が先程までいた寮からは煙があがっているのだとどこかの部屋の住人が小火でも起こしたのだろうか。

しかし夏休み初日である今日は寮に居るのは鳴神くらいのものだろう。

「つか、そんなところに居ないで出てこいよ」

唐突に彼が誰かに声を掛ける。

「やはり気付かれていましたか…」

壁の陰から出てきたのは女だった。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、Tシャツに片足だけ大胆にカットしたジーンズという常識の範囲内で少しおかしな格好をしているが、それら全てを打ち消すような物が彼女の腰に下がっていた。

二メートルを超える日本刀。物好きな人は持っているだろうが、本来学園都市にそんなものがあることが異常だ。
それをその女は持っている。

「お前、『中』の人間じゃねえな」
トントンと右の爪先で地面をノックする。

「ええ、『魔術師』ですから。」

「また変わったやつだな…。お前何者だ？」

『魔術師』

学園都市に存在する筈のない言葉。

それはオカルトの領域であり、存在する筈のない人間。

「私は『必要悪の教会』^{ネセサリウス}に所属する神裂火織と申します」

（ネセサリウス？）

鳴神は僅かに疑問を抱くが特には気にしない。

「お前、あの煙に関係してるな」彼は先程までいた学生寮をチラッと見る。

「あれはステイルの魔術ですね。私のものではありません」
神裂のポニーテールが風になびく。

「要するに仲間か。それよりお前——」
不敵な笑みを浮かべる。

「強いな——」

刹那、神裂を四方から六億ボルトの電撃が襲った。

「七閃——」

鳴神が放った全ての電撃が神裂火織の斬撃によって打ち消された。

その斬撃はそのまま鳴神の頭上三センチ程のところを引き裂いた。
彼の髪の毛が宙を舞う。

「へえ」

その洗練された動きに思わず声を洩らしてしまう鳴神。

「これでも退きませんか……。七閃っ！」

まるで鎌鼬^{かまいたち}。七つの斬撃が屋上のコンクリートを削りとっていく。
神裂は既に刀身を鞘に収めていた。
しかしその動作があまりに速すぎて肉眼では刀を抜いたようには見えない。

まるで、巨大なレーザーが鳴神に襲いかかってくる。

しかし——————当たらない。

「っ!？」

神裂が驚愕する。普通の人間ならそういう反応をするだろう。

鳴神が消えたのだから。

しかし直後には神裂の後ろに立っている。

「なっ!」

神裂は気配に気付き、刀を抜かずに鞘ごと背後を切り払う。鞘がある状態であつても風を切る音が聞こえる程の勢い。

しかし居ない。

また消えた。

神裂から5メートル程の距離の場所に

パチッ、という音が聞こえ、鳴神が現れる。

「貴方は一体何者なんですか？」

斬撃を繰り出しながら神裂が質問してくる。

「俺は、ただの高校生だよ——」

鳴神が質問に答えた瞬間、神裂を激しい目眩が襲う。鳴神が生体電

気进行操作したためだ。

鳴神の額を神裂の放った斬撃が掠めた。
一筋の血が流れる。

「このまま戦えばどちらもただでは済まなさそうですね——」
刀で身体を支えるようにして立つ神裂。

「確かに——」

鳴神の額から流れた血が頬をつたっていく。

「ここで体力を消耗するのは不味いですね……。一旦退くことにしま
しょう……」

そう言って神裂は屋上から去って行った。

一人残された鳴神は地面に大の字になって寝転ぶ。

「『魔術師』か——」

第一話序章 《幻想殺しの少年の隣のお話》（後書き）

オリキャラが数人欲しいですはい。

- ・ 暗部組織のメンバー三人
- ・ 鳴神の友達二人
- ・ 魔術師二人

こんなところです。

物好きな方居れば投稿お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6674y/>

とある科学の雷光共鳴《Lighting》

2011年11月20日16時22分発行